長谷川伸全集

第一卷

編輯　戸並長八郎

朝日新聞社

長谷川伸全集　第一巻
紅蝙蝠　ほか
全十六巻・第五回配本
一二〇〇円

昭和四十六年七月十五日発行
著者　長谷川伸
発行者　朝日新聞社　角田秀雄
印刷所　凸版印刷
発行所　朝日新聞社
東京　大阪　北九州　名古屋

装幀　原　弘
帯挿画　岩田専太郎

©SHINYOKAI 1971

0393-240101-0042

長谷川伸全集　第一巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

紅蝙蝠　五
戸並長八郎　二五九
解説　村上元三　五一五

紅蝙蝠

昭和五年九月—同六年二月　朝日新聞連載

うし町喧嘩

浪人戸並長八郎が高輪牛町の往来で、目にあまる牛方の荒くれ男に、ぐるりと包囲されてしまった。

長八郎、年は若いが、こんな経験はウンと持っているので潮の寄せたような夥しい人数を眺めて立派な白歯をむき出しニヤニヤしている。

長八郎は年二十六、身長は五尺二寸あまり、肩の幅、胸の幅、腰の幅、みんな均勢のとれた濶さ厚さである。

眉毛は濃い上に至って太い、眼はみごとにパッチリと大きい、笑うと二重瞼が際立って、存外可愛らしくなるのは彼を知る者の間では有名だ。それから鼻筋が確かによくとおっている、が、いかにも小鼻が幅をきかし過ぎている。口は前いった通り立派な歯に飾られ、並びのいい歯の色はとびきり白い。三万年前の新石器時代の人間はこんな歯ではないか、でなければ、紀元七百四十二年に叛して亡びた熊襲なぞの歯がこれだったろうと思わせる。いずれにしても徳川十代将軍家治の、いわゆる御治世の明和八年や九年には無類の歯だ。

それでは浪人戸並長八郎、醜男かというとそうでもない。眼がいいことは前にいった、そのほかに左右の頬に笑うとできる深い笑窪、これがあるので人好きがする。といっても、明和九年の春やや晩いころ——十一月二十五日以後でないと、「年号は安く永くとかわれども、諸色高くて今に明和九年」と落首が立った安永元年、とはまだいわない。その明和九年の江戸の妙齢の女は、こんな男ぶりがお好きでない。

その年の二月、目黒行人坂から出火して、二日つづきの大火で、江戸の大半が灰になった。罹災地をそのころ焼け場という。焼け場の長さ六里、幅が一里、死傷者無数。

焼け場の跡にまずバラックが建つ、それから本建築にかかる、その間に暴風雨が二度もあったがそれは別として、建築材料の運送だけでも、牛荷車は大繁昌だ。江戸随一の牛荷車と牛方の本場、幕府創立以来公認の牛町だけに、銭がここの土地をひどくうるおしたから、牛方の鼻息が荒い。

その牛方が協同で暴れだしたのだから、町の人も驚いているが名物の虻も蠅も右往左往だ。驚かぬものは先祖代々どんより物を見ている牛ばかり。

さらに、もう一ツ、驚かずにいるものがある、喧嘩相手の戸並長八郎源の兼氏。

この男はちょいと見ると、驚かぬどころか、却ってニヤニヤ笑って喜んでいるように見える、だが、これがこの男のいつもの癖で、実は、不穏の前兆である。

「ぶち殺しちまえ！」

「鼻面へ穴あけろ！」

浪人なれど武士たる者を、牛あつかいに罵る。

「わあッ！」
「わあ！」
と、殺気立って攻撃気勢をしきりに昂めている。しかし、牛方連中、喧嘩こそしているが、みなみな五分の同業仲間、親兄弟の仇なら抜け駈ける者もあろう、が敵は一人、味方は多勢ときては、威勢を遺憾なく示すものの危険は軽くしたいのが、かかる場合に、人間の持合す、感情と勘定とを差引きして出る答えだ。
今にもひた押しに攻め蒐り、浪人は解剖された鼠みたいになるか、と、一瞬ののちの酸鼻を想像させた、が、寄せ手の面々、牛方の勇士どもは、祭騒ぎに少し疋をかけた程度で、ただ空ッ景気の示威であるばかり。
長八郎は牛小屋の板部に背中を向け、両腕を組んで、無数の牛方を、パノラマ風に見渡している、やがて怒鳴った。
「おい、もういい加減にしろ、お前がたの強いのがよくわかった」
却ってこれは激発に役立った。
「なにッ」
「あんなことをぬかしゃがる」
「殺しちまえ。皮を剝いでしまえ！」
あらん限りに罵り喚き、八方で、何十本かの赤黒い腕が勇ましく振廻された。
「この野郎どもめ！」
と、長八郎、笑ったような顔つきがピタリと消えた。薄くれないに彩られた頬のあたり、笑窪などはもう跡形もない。
「ようしッ。俺は本当に怒ってしまったぞ」
と、彼、再び怒鳴った。
「怒れ！　面白えや。怒りゃがれ！」
「命のあるうちに怒っとけ！」
本当に怒ったら長八郎が、どのくらい無鉄砲に強くなれて、幾人を殺し幾人を傷つけ得るか、牛方連中の方ではまるで知らない。それだけに多勢をたのみにして割合のん気だ。
「わあッ！」
「それぶち殺せ。牛剖きにしろ！」
鯨波の声が四方から轟く。
他人の背後に隠れて物を投げつけて似非勇気を見せる者がある。石が飛ぶ。牛の沓が飛ぶ。棒ちぎれが飛んだ。ひどいやつが牛の糞を投げた、こいつは最前列の味方の頭の上で分裂した。
「やい馬鹿。なにをしやがる。ペッペッ」
と、大騒ぎ。内訌さえ二、三度起った。
その時に長八郎、怒ったぞと予告のごとく。
「うぬッ！」
ぱッとからだの構えが変ったと見ると、まくしあげた袖の下、二本の逞しい腕が、一、二度伸び縮みをしたのはホ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ンの瞬間で、牛小屋の板蔀に指がかかって、ベリッベリッ、急速度でひんめくられた。手でひんめくるばかりか、脚でも蹴放す、見る見る屋根と柱ばかりの風吹き貫きの小屋になり、うしろ向きの繋ぎ牛が、まだらな尻を驚いて縮めた。

「うウわあア」

と、牛方連中どよめきたった。人間をやッつけずに牛小屋をやッつけた見当違いの奮闘をどッと笑う声でもある。

「小手調べは相済んだ。さあこれからだ」

満身、紅を塗ったようになった長八郎。

「うぬらを死びとにして積みあげ、当分この町内を往来止めにしてやる。さあこい！」

と、二ツの拳を固めて睨め廻した。

「石だあ石だあ。石を抛れ。石攻めにしろ！」

他人の背後に首を縮め、隠れて、下知をかける牛方仲間の策戦家がある。

「成程。やれ、やれッ」

と、手に手に牛方は、落し物を拾うように争って石を摑み投げた。

初めは間遠くバラバラとそそいでいた石礫の雨が、やがて一変して颶風にのった夕立のよう。横に長八郎の頭の上、足もと、右に左に蝗のようだ。

「畜生ッ」

身顫いして長八郎、ひんめくった蔀板を二枚両手に持ち、楯に代用して身を護り、横ッ飛びに急ぐ向うは牛小屋の外れ。

そこには空ッぽの牛車が十二、三台、道路の隅に行儀よく、一列縦隊に日を浴びている。

「よいしょッ。よいしょッ」

と、はしりながら長八郎、両手二枚の蔀板で飛びくる石礫を束にまとめて叩き返した。

「あ痛え」

「きゃッ」

牛方連中、数が多いだけに当りも多い。ところどころで悲鳴がおこる。

牛車に近づいた長八郎、蔀板を群集に叩きつけて、

「よいしょッ」

と、車に手をかけ引起し、群集めがけて抛り出した。

「うわッ」

異様に叫んで牛方連中、逃げるわ、逃げるわ、蜘蛛の子ぢらしにさッと逃げた。車は宙でもんどり打ち、地響き高く往来へ落ちた。

「よいしょッ」

長八郎は、二台目の牛車を叩きつけた。

「よいしょッ」

三台目を抛り出した。

牛車は象の骸骨のように、人気が急に薄らいだ往来の真中でひっくりかえっている。

「まだ、うぬらは懲りまいが」
と、長八郎、四台目の牛車を肩にひッかけ、四方をギョロギョロ見廻した。牛方連中は気を呑まれて退散し、露地口のところどころに、三つ四つの頭が覗いているだけ。
と、海岸寄りに十二、三人が、決死隊と見えて攻勢に移ろうとしている様子。それを見つけて長八郎、牛車を担いでどんどん駈けた。
「うぬら、この車でぶちのめしてやる。動くな、待ってろ」
あまりスラスラとはいえなかったが、とにかく、こういって迫進した。さすがに牛車は持ち重りもするし、陽気は晩春だ。長八郎はまるで湯からあがったように満身汗みずく。
牛方連中の決死隊は、それを見ると南瓜のように青くなって逸散に逃げ始めた。
芝高輪で名高いのは泉岳寺の赤穂浪士の墓どころ、如来寺の大仏。
それとはこと違うが、牛町の千場といえば苗字帯刀御免、九州のさる大名に金を貸付けているのが家の誉れという、牛屋五軒のうちでも飛切りの大世帯、金ぶくれが外から見える宏大な家がある。
長八郎に追いつめられた牛方の面々は、石礫を投げて盛りかえす勇気が消えてしまい、早く逃げて姿を隠すそのほかに考えがない。味方同士でありながら、掻きのける、突倒す、先を争う。もっとも背後からは、無法とも乱暴とも、定規のあてようがない長八郎が、空ッぽとはいえ重い牛車をひッ担ぎ、逃げ遅れたやつを頭からのめして板にしそうな勢いだから、義理は多少欠いても逃げるがだいじという気になっている。
「やい、どけッどけッ」
「何をいやがる俺がさきだい」
「なにをッ」
「なんだとッ」
戦さでいえば惣崩れ、浮き足たまらず落ちて行く。自分ばかりが助かりたい人情のよくないところをまともに曝けだし、犇めき合い、どやどやと逃げ込んだのが千場家の門内。だれが先というのでなく、一同、息を殺している。千場家の者も弱ったが手のつけようが差当ってない。
「致し方がないから捨ておこうか」
「高見から見物でなくて、窓から見物していようか」
「女子供は顔も出さぬがいいぞ」
ところが、その時分に長八郎、重い空の牛車を担いで、ご苦労にも引返して元あった場所へ置いていた。そればかりか、自分がほうりだした三台の牛車を、一々引起して元の場所に置いた。少し壊れたのもあったが長八郎、たいした破損はないつもりである。
「やや！」

と、長八郎が、いまさらながら驚いた。自分がひンめくった牛小屋の部ながら、内側からまだら牛の尻が、巌のように盛りあがって、籠のように揺れているのを見て、はッと驚した顔になった。

時に、往来に面したもろもろの家の人は、暴風雨が去ったあとのように、軒の下にでて長八郎を見物している。咎めもしないが褒めもしない。

「困ったことをしてしまったぞ」

と、思うと長八郎、首をすくめていっさんに逃げ出した。背後からだれか「こらッ」と叱りはせぬかと、気になるので逃げながら振返る。まるで童の稚態だ。

一方では千場の門内、怖毛だった牛方が碌にまだ口もきかずにいるところへ、閉めた門の扉をとんとたたく者がある。

「わッ。浪人が押しかけた」

「門破りをするか知れねえ。門を押えろ押えろ」

窮鼠の覚悟でよんどころなく、ガヤガヤ騒ぎ立て、扉に必死と大勢がしがみつき、何でもかでもと押えている。

「おい開けろ俺じゃ。お前らが千場様の御門内へ逃げこんだと聞いて来たのじゃ。おい開けんかい俺じゃ。安心して開けろ」

と、外の声は野太い。

「元締だ、元締だ。もし元締さんですか」

と、内からそッと問い試みると、

「そうじゃ。谷ツ山太郎左衛門じゃ」

「おう。いま開けます」

一本刀で大兵肥満の谷ツ山が、開かれた門前に立っている。牛方連中はたちまち元気をよみがえらせ、うって変って陽気になり、続々、往来へはみ出した。

「こいつらのなんとまあ腰のないことじゃ。それで牛町の者じゃと他人にいばれるか。喧嘩相手の浪人はどこへ行った」

「さあ、どこへ行ったか」

「元締は途中で逢いませんでしたか」

「阿呆、俺のこの眼にはいったら、武士でも柳でも、そのままにしておくか。お前らが縮みあがっている門などはたたかず、その野郎の鼻梁をたたいているわ。さあ、お前らのうちで腰のつがいの丈夫なやつ六、七人で案内に立て、見当り次第、その乱暴人をひッ摑み、犬ころ投げに投げ飛ばし、首たまに縄つけて町内ひきまわしの上、お上の衆へお渡し申すわい」

「こいつは景気が持ち直した。元締が来てくれれば百人力だ」

「そうとも。いつか悪ざむらいを三人手玉にとったのは元締だ」

「いまさらの追従、みともない。さあ案内に立て。急ぐのじゃ、急ぐのじゃ」

どんどん逃げた長八郎は、田町で急にきょとんと立ち停まり、老いたる武士の遠くなり行くうしろ姿に眼をみはった。

「叔父さま！」

大声をあげて呼んでみた、が、叔父さまには聞えぬらしく、右に曲って姿が消えた。

通行の男女さまざまなる顔が驚き訝かり、あるいは笑い、長八郎を顧みたが、当人はそれをなんとも思っていない。彼はただいまの働きで跣足になっていた、流るる汗も出しっぱなしだ、衣紋も崩れている、丁髷も歪み、鬢も乱れている。当人はそれをなんとも思っていない。

叔父さまの姿が消えた角まで行った長八郎は、何の躊躇なく曲った。

「どこの家かな」

なぜというわけはない、が、叔父さまが通り抜けて行ったとは信じない、で、家という家を覗いて歩いた。ではあるが、探すあてがあってここだと鑑定する、よりどころを持たない、漫然と探し歩くのだからわかるわけがとてもない、といって彼は断念などしない。

「さあ早く見つけたいものだ」

と、溢れる感情が、たったいまの喧嘩のことなど、ことごとく胴忘れさせている。

追出されてからでも足掛け九年目、往来で出会うて叱りつけられてからでも三年目の絶えて久しき叔父さまだ、また叱られるかもしれないが、叱ってくれる人が恋しい長八郎、牛町の喧嘩とは別ッこな上気した顔で、いとも熱心に、ほとんど軒別、考え考え探しめぐった。

こうして存外に暇どっている一方では、谷ッ山太郎左衛門が大将で、選抜された牛方が七人、ぞろぞろ浪人者を探している。

「あ、その浪人なら田町の方へ行った」

と、教えてくれる人があったので、

「それ、野郎ども、急げ急げ」

谷ッ山が先に立って急いだ。

「浪人ですか？　さあ、その人かどうか知りませんが、そこを右へ曲って行ったが」

と、別な人からも教えられて谷ッ山はまたも、

「それ、野郎ども、急げ急げ」

と、大股にひょいひょいと歩いた。

「ここじゃな」

覗いた横道に人気はなかった。

「それ、野郎ども、俺の後からこい」

谷ッ山は相変らず先に立ち、横路へはいって、巡目しながら歩いて行く。

「元締さん、いたいた」

こそこそと追いついて囁く者がある。

「どこに？」

「こちらの路の、それ、あすこに」

まことにそこに長八郎が、他人の門前に佇み、叔父さまの声やする、姿や見ゆると、覚束ないことをあてにして立つ姿があった。
「確かに、あの野郎じゃな」
「はい」
「間違うと後で俺が面皮を掻くぞ」
「違うものか、確かにあいつだ」
「よし、では俺が一ツやってやる。野郎ども、そこで見物しとれよ」
そんな者が来ているとは、気のつかぬ長八郎だ。
(ここの家は、あまり立派だから叔父さまの住居と違うだろう)
一軒先の門の前に、あらためて立った長八郎。
(人の声が少しもせぬが――はて、こんなことしていたらいつわかる？　そうだ。この辺の家という家、残らず尋ね歩いてみよう)
これは名案だと手近な家の玄関へはいりかけた時、後から谷ツ山太郎左衛門が、
「浪人殿。待った」
「俺か」
「おお、おぬしじゃ」
近づくとすぐ谷ツ山は、むずと長八郎の手首を摑んで、
「おいしょッ」と喚いて捻じあげた。えらい力だ。
「うぬ！」
少しばかり腕を捻られかけた長八郎、足をあげて谷ツ山の脛を蹴った。
「あッ、こん畜生」
と立ち直る隙を与えず手を振払った。さあ、これでもう両人対等だ。
一撃でひっくり返すことができる長八郎だが、敢てそれをしなかったのは、後に従う七人の牛方とは服装がひどく違っている谷ツ山だったからである、牛小屋の主人が怒ってきたのだと解釈し、毛脛を蹴った以上に手出しをする気がさらにない。
それにまた谷ツ山太郎左衛門が素晴しい大男で、顔はといえば鬼のようなまッ赤だった。牛方と違って派手な色の絹物に、一本刀を腰に横たえてさえいる、長八郎でなくとも、一応は、見誤るかも知れない。
長八郎は黙っている。牛小屋の板部をひっぱがしたり、牛車をほうりだしたりした、その点を責められれば、ぐうの音も出せないと思い、ここでの出るのをいまかいまかと恐れている。
「おい浪人殿。お前さま少し力があるな」
長八郎は当惑して眼のやり場に困っている。力のことどころではない気もちだ。
「ようも俺の可愛い子方の者を、ひどい目にあわせてくれたものじゃな」
「いや。男どもをひどい目にあわせはせぬ。車と部とは、

ちと手きびしくいじめたが」
「車じゃと、蔀じゃと。何をぬかすのじゃ。性根のない車や蔀のこと咎めはせぬ」
「さようか。それならば安心だ」
「なに？ フン、奇態な男じゃな。俺はこいつらの頭じゃ。こいつらがひどい目に逢うたのは俺がひどい目にあわされたと同じことじゃ」
「わかったよ。喧嘩の仕直しに追いかけてきたのだろう」
「俺は喧嘩などせぬ」
「では、なんで、追いかけて来たのだ」
「乱暴人をフンづかまえるためじゃ。おのれッ」
谷ツ山が大手をひろげ、自慢の強力で締めつけようとかかる。長八郎はすばやくかわして、相手の腕に虚空を抱かせ、とッとッと逃げると見せて、実はいましがた通ってきたばかりの足場にして有利なところへ急いだ。
「さあこいッ」
そこは海に近いと見え、潮の香が芬とする。
「野郎め！」
谷ツ山はがむしゃらに追従する、そのあとから七人の牛方が「わいわい」といいながらつづいて走る。静かな土地柄だけに騒ぎが際立って聞える。
長八郎は、いずれの人の持ち家か知らず、高塀の下で身構えた。
谷ツ山は、その間近くにきて突ッ立ち、七人を背後に控えさせ、下駄を脱いで、裾を端折った、それから腕まくり、大いに沈着ぶりを発揮している。
「刀へ手をかけるなよ」
と、長八郎は、それを眺めながら怒鳴りつけた。
「なんじゃと」
「たかが喧嘩だ、刀を抜くほどのことはないだろう。お前が抜くと俺も怒って抜くかも知れぬ、そしたらお前の首が飛ぶぞ。それでは俺が迷惑する」
「おかしなことをいう男じゃ。よし、頼むとあれば刀は抜くまい」
「それがよかろう。不得手のことはなるたけせぬものだ」
「それいくぞ。谷ツ山太郎左衛門は江戸名代の力量じゃ、聞き知ったか」
諸肌脱ぎになった上半身は、まれにみる筋肉の発達ぶり。
「そんなことは知らぬ」
「知らせてやるから憶えておけ」
飛びかかるをかわそうとする長八郎だ、かわそうとするを、ひッつかもうとする谷ツ山だ。離れているようでくっついているようで、揉み合うようで追いかけるようで、名状のできない暫時の後に、鮮やかに長八郎は左へ抜けて出た。そのとたん、
「あわわッ」
と、叫んだ谷ツ山が、偉大な肉体を蹴つまずいたように

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.